シリーズ 改修による建物再活用⑭

小学校跡地を教育・福祉の複合施設へ

―昭島市教育福祉総合センター「アキシマエンシス」整備事業―

磯村（いそむら） 義人（よしひと）
昭島市 教育委員会 生涯学習部 部長

櫻井（さくらい） 健太（けんた）
昭島市 都市整備部 建築課 建築係 係長

1 はじめに

昭島市は、昭和29年５月１日に昭和町と拝島村が合併し、東京都で７番目の市となり、本年で市制施行70周年を迎える。

東京都のほぼ中央に位置していることから、都心部へも奥多摩の森へもアクセスしやすい立地条件のもと、安全で利便性に富んだ都市基盤と、豊かな水と緑の環境が調和した、快適で暮らしやすい住宅都市として発展を遂げ、現在の人口は、114,000人余りとなっている。

写真１　アキシマエンシス全景

この恵まれた地域特性を基盤として、令和４年に制定した総合基本計画では、まちづくりの目標――将来都市像を「水と緑が育むふるさと昭島～多様性と意外性のある楽しいまちを目指して～」としている。

本市には大きな特色が二つあり、一つは、深層地下水100%の水道水である。本市の水道水は、近隣の山などに降った雨や雪が約30年という長い年月をかけて浸み込んで昭島市の地下150～200mより深いところに流れ着いた深層地下水で、それを市内20ヵ所から汲み上げ、水道法に定められた最低限の処理を施し、ご家庭にお届けしている。

もう一つの特色は「アキシマクジラ」である。今から63年前、昭和36年８月に市域の多摩川河川敷において約200万年前のクジラの化石が、ほぼ完全な形で発見された。全長13.5m、コククジラの仲間で「アキシマクジラ」と名づけられ、半世紀以上にわたり市民に親しまれてきた。

平成30年１月１日には、この化石の研究論文が日本古生物学会の英文学会誌に掲載され、新種のクジラとして「エスクリクティウス　アキシマエンシス」と学名を付与され、この学名が、公募により命名された本施設の愛称「アキシマエンシス」の由来となっている。エントランスには、アキシマクジラの原寸大レプリカを展示しており、また、図書館に併設された郷土資料室ではプロジェク

写真２　アキシマクジラの原寸大レプリカ

ションマッピングを駆使した展示がなされている。

2　整備の基本方針

アキシマエンシス整備事業は、平成９年２月に策定された「昭島市庁舎跡地利用基本構想」に端を発する。この構想においては、市の庁舎(分室)跡地を活用し、市民の学習意欲の高まりに十分対応できる図書館活動の拠点としての機能、市民の共有財産である貴重な文化資産を後世に正しく伝えていくための機能、教育の充実及び振興を図るための機能を有する施設の整備を行うものとされていた。

その後、庁内で検討を進める過程において、当初想定していた機能に加え、男女共同参画ルームを加えた社会教育複合施設とし、市民ワークショップにおける様々な意見を踏まえ、市民検討委員会において「つなぐ・広がる・見つける・育む」をコンセプトとした「社会教育複合施設建設計画基本方針・基本計画」が平成24年３月に策定された。

3　建設地の変更と計画の推進

平成24年４月、児童福祉法が改正され、児童発達支援センターの設置が市の努力義務となり、また、平成25年８月に建設予定地から近いつつじが丘南小学校が統合により廃校となることが決まった。

これを受け、平成26年６月、課題となっている児童発達支援センターも含め、つつじが丘南小学校跡地を有効活用し総合的に整備することが望ましいとの昭島市行財政改革推進会議からの提言が市議会全員協議会において報告され、建設地が市庁舎跡地からつつじが丘南小学校跡地へと変更になり、併せて名称も「(仮称)昭島市教育福祉総合センター」となった。

同年７月から建設計画説明会を計３回実施し、翌平成27年10月には、公募型設計プロポーザル方式により㈱佐藤総合計画に基本設計業務を委託し、市民ワークショップ、子どもワークショップ、市民説明会、及び基本設計案に関するパブリックコメントの実施を経て平成28年５月、基本設計が完了した。

直ちに実施設計に着手し、翌平成29年11月に着工、令和元年６月には、公募により愛称を「アキシマエンシス」に決定し、令和２年２月竣工した。

4　整備事業の概要

様々な施設を一つの小学校の敷地の中に複合し、お互いの活動を触発することで、昭島ならではの活動や交流を発信できる新たな学び舎を整備することをコンセプトとした。校庭に増築した「国際交流教養文化棟」を施設の中核として、既存の校舎及び体育館をリノベーションした「校舎棟」と「体育館」の主に三つの建物で構成されている。建物間を渡り廊下等で接続し、連携させることで、新たな交流「学びの回遊」を創出することをテーマとし、施設の配置計画を行った。

国際交流教養文化棟には、「市民図書館」、「郷土資料室」、「講習・研修室」及び「シアター」、校舎棟には、「教育センター」、「子ども家庭支援センター」、「児童発達支援担当」、「子育てひろば」、「男女共同参画センター」のほか、複数の「会議室」、「音楽室」、「理科・家庭科室」を配置し、令和７年度には子ども関連の部署を統合した「(仮称)子ども家庭センター」が設置される予定となっている。体育館には、ホールとしての機能も備えている。

増築した国際交流教養文化棟は、各棟との交流を促す、四周正面となる施設として、建物同士との関係性を高め、多様な連携を可能とした。校庭に一つの屋根を架けるかのように、それぞれの場所に応じた高さ設定をした屋根を計画し、特に既存校舎とは２階で渡り廊下を経て接続することを

計画し、階高や屋根の高さを制限するよう工夫をしている。その一つがフラットスラブの採用である。既存校舎の１階階高約４ｍに合わせつつ、図書館にて開放的な空間を創出するために、１階見上げの梁形をなくすことで有効階高を確保しつつ、段差なく既存校舎に接続できるものとした。またこれにより、１階の柱の配置についても自由度を高めた。

校舎棟は、昭和56年に竣工し、平成23年に耐震補強工事を実施していた建物であったため、躯体改修は行わず、内装改修、防水改修、設備改修とバリアフリー対応として、エレベータ棟の増築を行った。改修後は複合施設として多くの機能を集約した建物とし、既存の職員室を窓口となる事務室に、普通教室より大きな間取りである特別教室を大きな会議室などに転用するなど、既存の間取りを最大限活用しながらの配置計画とした。集約した施設業務にて、個別相談業務が多かったことから、多くの相談室を設け、共有化することにより、スペースの有効活用を図ったことも特徴である。

体育館は、教育センターに通う児童生徒の軽運動や発表、研修会など多様な利用ができるよう、空調設備を設置し、さらには電動式可動客席を設け舞台を見やすくする改修を行った。学校の統合により本施設の利活用を計画したため、統合前両校の校歌パネルを掲げるなど、通学した児童の思い出を残す配慮も行った。

また、各施設共通で学校の跡地という点を記憶と歴史を継承したいという想いのもと、学校のイメージを創出させるべく、サインや看板のほか、図書館の書架の側面等に黒板のデザインを採用した。学校の正門も残し、シンボルであった桜の木を入口正面に残すなど、既存施設の面影を残す計画にて整備した。

5　施設の概要

施設の中核となる国際交流教養文化棟には、図書館及び郷土資料室が設置されている。図書館の名称は、「市民」の図書館との思いを込め、「昭島市民図書館」としている。

昭島市民図書館は、昭和48年５月、市の東部に開館し、以来、市民に開かれた知の拠点として親しまれてきたが、都道の拡幅計画により令和元年12月に閉館し、本施設へ移転することとなっていた。

新たな図書館を建設するにあたっては、初めに、これからの市民図書館のあるべき姿を定め、それをしっかりと設計に活かすことができるよう、平成29年３月に「昭島市民図書館基本方針・基本計画」を策定した。

この計画では、「学び・習い・楽しみ・育む知の拠点～本と情報を仲立ちとして人が集い、つながり、新たな価値を創造する場を目指して～」を

写真３　校舎棟（左）と国際交流教養文化棟（右）

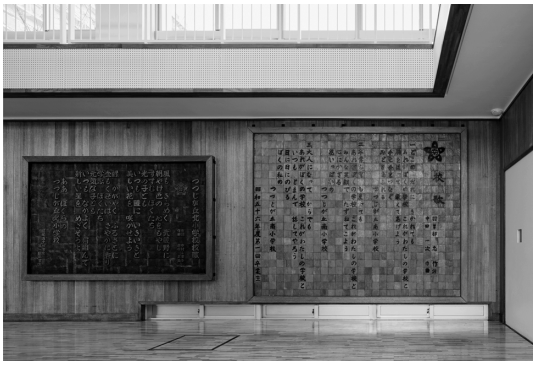

写真４　統合前の両校を偲ぶ校歌パネル

基本理念として定め、
「学び成長を応援する図書館」
「仕事や暮らしに役立つ図書館」
「楽しい図書館」
「地域とつながる図書館」
「誰にでも利用しやすい図書館」
の五つの基本目標を掲げた。

図書館の規模は、1階、2階合わせて約4,000㎡、蔵書規模は、開架20万冊、閉架20万冊の合計40万冊となっている。

さらに、この市民図書館には、多彩な閲覧環境と学習環境を備え、ICTを活用した図書館という特徴がある。

閲覧環境においては、全館にフリーWi-Fiを配備し、スマホやパソコンなどの充電・給電が自由にできる「電源付き閲覧席」、静かな環境で読書に専念できる「静寂読書室」を設置し、快適さにこだわった様々な椅子を配置している。

学習環境においては、全48席の学習席、19歳以上が利用できる研究個室6室、6人で利用できるグループ学習室2室、中高生対象のティーンズ学習室2室を備え、座席予約システムにより貸出しを行っている。また、連結して使用することも可能な36人定員の講習・研修室3室及び100人定員のシアターも設置している。

もう一つの特徴は、最新のICTの活用である。図書資料をすべてICタグにより管理し、利用者のプライバシーに配慮したセルフ貸出・返却の仕組みや、貸出券のSuica、PASMO及びスマホとの紐づけ、学習席などの座席予約システム、預金通帳型の「読書の記録」を導入した。

セルフサービスの導入により、コロナ禍において利用者と図書館職員の接触を最小限に留めることができるという、当初想定していた以上の効果を得ることができた。

また、併設する郷土資料室においては、プロジェクションマッピングを駆使したインタラクティブな展示が評判となっている。

写真5　図書館内のゆったりとした書架スペース

リノベーションした校舎棟には、市の教育センターや男女共同参画センター等、市の部署のほか、分割して大小様々に使える会議室や音楽室を備え、体育館は、中規模のホールとしても利用可能である。これらは、有料貸出しが基本であるが、施設利用の要件を満たした市民団体には無料で貸し出している。

なお、図書館を含むアキシマエンシスの管理・運営は、令和元年度から指定管理者による運営に移行している。

6　市民のサードプレイスとして

この施設の新しい図書館は、開館し5年目に入ろうとしているが、移転前の令和元年度末の登録者24,297人、登録率21.4%から、令和5年度末では、登録者47,159人、登録率41.2%と大幅に増加し、現在も増え続けている。

本施設が、多彩な閲覧環境と学習環境を備えた知の拠点として、また、校舎棟や体育館を市民活動の拠点として、自宅や職場、学校でもない居心地のよい第三の場、サードプレイスとして、ゆっくりとくつろいでいただき、また、様々な目的をもって、人が集い、つながり、新たな価値が生まれる場となってくれることを願っている。